

Digest of Science of Labour

労働の科学

2022
July
Vo1.77, No.7



青い花／山本美智代

特集

医療勤務環境, 医療従事者の働き方改革

医師の働き方に関する医師自身の自己評価および要望に関する調査／野原理子

医療機関における産業保健活動 働き方改革への布石／太田由紀

ICTシステムを活用することで医師の働き方改革を強力に推進—

医療機関の業務・組織のマネジメント強化に加え、
地域の医療需要に応えるサービス体制を実現する／鈴木邦彦

連載 ILOインド・南アジアこぼれぼなし⑮
川上 剛

大原孫三郎と清水安三⑩
兼田麗子

大原記念労働科学研究所

巻頭言

ひとのつながりと
組織の発展
齊藤 進

連載

凡夫の安全衛生記⑥⑤
福成雄三
漂流者たち—クミジヨの肖像⑬⑥
本田一成

労働の科学



巻頭言

俯瞰 (ふかん)

ひとのつながりと組織の発展

齊藤 進 [大原記念労働科学研究所 主管研究員]

1



表紙作品：山本美智代
「青い花」

ドローイング+コラージュ (26×23cm)

表紙デザイン：大西文子



医療勤務環境，医療従事者の働き方改革

医師の働き方に関する医師自身の自己評価および要望に関する調査

[東京女子医科大学 医学部] 野原 理子 4

医療機関における産業保健活動 働き方改革への布石

[JA北海道厚生連帯広厚生病院 産業保健師] 太田 由紀 10

ICTシステムを活用することで医師の働き方改革を強力に推進

医療機関の業務・組織のマネジメント強化に加え，地域の医療需要に応えるサービス体制を実現する

[富士フィルムメディカル株式会社] 鈴木 邦彦 15

Special contribution

特別寄稿

医師のワーク・エンゲイジメントに関する 観察研究を対象とした文献レビュー

[東京女子医科大学] 川名 由貴，櫻谷 あすか，三木 貴子，野原 理子 25

Graphic

写真でみる労研の歩み (5)

..... 口絵

Series

ILOインド・南アジア こぼればなし (15)

アフガニスタンの中小企業..... 川上 剛33

孫三郎, 経営に腕を振るう

大原孫三郎と清水安三(10)..... 兼田 麗子36

漂流者たち クミジョの肖像 (16)

『クミジョ白書2019』(4)..... 本田 一成40

凡夫の安全衛生記 (65)

「さまざまな組織・立場で③」戸惑いから始まる..... 福成 雄三42

「#教師のバトン」で伝わる (14)

教職員の過酷な勤務環境..... 藤川 伸治 44

Column

Talk to Talk

日々や如何に..... 肝付 邦憲48

KABUKI

助六由縁江戸桜

歌舞伎で生きる人たち その十五——宿命, 月と太陽..... 湯浅 晶子50

つれづれなるままに

映画に学ぶ..... 千葉 百子52

BOOKS

『生命知能と人工知能 AI時代の脳の使い方・育て方』

意識は生命知能の源..... 椎名 和仁57

労働科学のページ.....58

次号予定・編集雑記..... 64

ひとのつながりと組織の発展

齊藤 進

1920年、大原孫三郎が若き暉峻義等をともない、深夜の倉敷紡績工場で大勢の若い女工さんたちをみた翌日、大原は工場長に倉敷労働科学研究所（以下、労研という）の設計を命じています。大財閥トップの大原孫三郎と、卒業したばかりの医学士暉峻義等との接点につき、労研60年史話に記載があります。

1917年に東大医学部を卒業した暉峻は、本所深川のスラムに泊り込んで住民の健康調査等を行っていました。そこへ、大原社長が信頼を寄せている使者の高田慎吾を暉峻は迎えています。ヒューマニストで非常に勤勉な高田は、1908年に東大法学部を卒業した後、東京市養育院や石井記念愛染園等を経て、大原が設立した大原社研最初の研究員として赴任しました。同年齢の大原と高田及び若い暉峻を含め、いずれも大正デモクラシーの理念を共有していたのであろうと私は思っています。

労研の名称に暉峻が労働科学を冠した抛り所が、1866年にウクライナのキーウ近郊で生まれたヨセファ・イオテイコの著書です。暉峻労研の労働科学とは別に、働くことの科学という欧州起源の考え方があったことを、私は以前にポーランドで開催された会議で知りました。同国にルーツがある米国カルヴォフスキ教授が、1857年に同国で出版されたヤストシエンボフスキによる書籍を

回覧しました。そこには、ギリシャ語由来のエルゴノミクスを造語し、働くことの科学という概念を着想したとありました。労研では同書籍を和訳し、労働科学88巻6号189-219頁で公開した論文は、JSTAGEで誰でも無償で閲覧することができます。

ポーランドを母国としたイオテイコとヤストシエンボフスキは、ともにワルシヤワ近郊のポヴォンスキ墓地に埋葬されています。お二人に会うことはもちろん叶いませんが、研究者が成した仕事を記録することの意味を、残された書物が私たちに訴えているように思います。

倉敷に誕生した労研は、太平洋戦争の荒波をくぐり抜け、世田谷区祖師谷と川崎市菅生を経て、現在は桜美林大学の新宿キャンパスに拠点を置かせて頂いています。移転に際し、桜美林学園の佐藤東洋士前理事長及び現在の小池一夫理事長と濱健男理事等には、町田キャンパスの由緒ある崇貞館を会場とした会議等で、大変お世話になりました。崇貞館は、桜美林創立者である清水安三が、北京に設立した崇貞学園に由来した名称です。清水と大原には、清水の米国オベリン大学留学を大原が支援する等の接点があり、兼田麗子桜美林大教授が本誌に連載しています。

労研の歴史を振り返ったとき、もっとも決定的なキーは、人と人とのつながり



さいとうすすむ
大原記念労働科学研究所 主管研究員、
認定人間工学専門家、(一社)日本人間工学会元会長、(独法)労働安全衛生総合研究所フェロー研究員、国際人間工学連合フェロー

ではないでしょうか。最大の困難は、人はキーを持つてはいなくても、そのことに気付かないことでしょう。やみくもにドアを開けてまわる時間は、若者といえども残されていません。

人とのつながりが、思わぬ人生の転機になることを、本誌6月号の特集記事で学びました。年末の築地場外市場をみて、私も働きたいと佐藤友美子氏がその場で店主に伝えたことが、いま築地で有名な鮭専門店主となった歴史を綴った仕事記でした。本誌N編集子とのつながりもありました。

労研は女性労働研究のメッカでありながら、OG等が極めて少ないことが不思議です。女性とのつながりの少なさが、いまの労研の弱さの根拠かとも思いますが、半分は戦力で闘ってきたようなものではないでしょうか。一人のOBとして、労研の発展を心から祈念しています。



俯瞰 ぶんかん